

タイ語文献について (2)

— Phraracha Phongsawadan Krung Kao —

石井米雄

1. 本稿はアユタヤ史の基礎史料中《*Phraracha Phongsawadan Krung Kao*》(アユタヤ王朝年代記)と称されるものを取上げ、今日入手可能な7種の刊本の各々につき簡単な解説を加え、これらの「年代記」を利用しようとする研究者の便に供することを目的とするものである。

2.1. 今日までに発見された諸写本の比較研究の結果、「アユタヤ王朝年代記」(以下誤解を生じないかぎり「年代記」と略称する)には、《*chabap yq*》(略述本)と、《*chabap phit-sadan*》(詳述本)の2種が存在していたことが知られている¹⁾。

2. 「略述本」は航海日誌などに比較されることもあるように²⁾、生起した事件の簡単な叙述と、場合によりこれに簡略な説明を加えた編年体の年代記である。

参考までに「略述本」の一部を以下に訳出しておく。

◎小歴686年子年, Phraçhao Phanaeng Choeng 大仏の建立を始めた。

◎小歴833年卯年, 白象を捕えた。

◎小歴852年戌年, Mūang Phichai の城壁の造築をはじめた。

一方「詳述本」は、同じく編年体の体裁をとってはいるが、前者にくらべ叙述ははるかに詳密である。G. Coedès は「詳述本」に《*Chroniques*》の名を与えている³⁾。

3. 「略述本」の原本は小歴1042年(1680年)ナライ王(Somdet Phra Narai Maharat, 1657~1688)の命により編纂されたもので、今日《*Luang Prasoet*》本および《トンブリー王室本》の二種の残簡本により伝えられている。「詳述本」が1350年のアユタヤ莫都に筆を起しているのに対し「略述本」は、さらに26年を溯って小歴686年(1324年)の大仏建立に触れている点が注目される。現存の写本では小歴966年辰年(1604年)までの叙述しかないので、おそらくこれに続く第2巻を有していたと推定される原本がどこまでの叙述を行っていたかは不明である。

1) 《*chabap yq*》は le type bref (Schweisguth), le type concis (Coedès) などと訳され、《*chabap pit-sadan*》(《*visāra*》)は le type détaillé (Schweisguth), le type développé (Coedès) と訳されている。

2) P. Schweisguth, *Etude sur la littérature siamoise*. Paris, 1951. p. 107.

3) G. Coedès, "Une recension palie des Annales d'Ayuthya". *BEFEO*, 14. p. 1.

4. 「詳述本」の原本は「小歴1136年本」と呼ばれる残簡本によってわずかにその原型をうかがうことが出来るに止まる。「小歴1136年本」は、いわゆる「Banphanaek」と呼ばれる序の部分の欠くので、原本の編纂の由来および成立の年代を推定する手がかりがないが、ダムロン親王 (Krom Phraya Damrong Rachanuphap) は残簡本の文体を比較研究した結果、本書の成立につき、ポロマコート王 (Somdet Phra Čhao Boromakot, 1733~1758) の勅令により編纂されたものであろうとの推定を下している⁴⁾。

3. 上にのべた「年代記」の原本および写本は、1767年のビルマ軍によるアユタヤ攻撃の際ほとんども散逸してしまったものと思われる。

トンブリー王朝 (1767~1782) に入ってからこれらの散逸した「年代記」の収集に努力が払われた。「略述本」については「トンブリー王室本」(Chabap Luang khong Phra Čhao Krung Thonburi) が1912年に発見されており、また「詳述本」については同じく「王室本」すなわち「小歴1136年本」の一部が発見されていることはトンブリー時代に「年代記」復旧の事業が行なわれていたことを証拠立てるものであるといえよう。しかしトンブリー時代にこれらの「年代記」の校訂事業がどの程度行なわれたかについては今後の研究にまたねばならないが、少なくとも「略述本」に関するかぎり、「Luang Prasoet 本」と「トンブリー王室本」の2本がほとんど完全に一致するところから校訂事業は行なわれなかったのではないかとの見方が行なわれている。「詳述本」についても古写本の再構にとどまり、実質的な加筆訂正はほとんど行なわれなかったものと考えられている⁵⁾。

4.1. ラタナコーシン朝 (1782~) に入るとまず初代のラーマ1世王 Somdet Phraphuttha Yotfa Čhulalok (1782~1809) の時、勅命による「詳述本」の校訂⁶⁾が行なわれている。校訂者は Prince Mähésuén Inthāramèt⁷⁾、校訂本の成立は小歴1157年 (1795年) とされており、「Phančanthanumat 本」22巻として今日に伝えられている。

2. その後ラーマ3世の治世においてパラマヌチット親王 (Somdet Phra Paramanuchit Chinorot, 1790~1853)、による「年代記」の校訂が行なわれた。校訂本は「Somdet Phra Paramanuchit 本」と呼ばれ、後に米人宣教師ブラドレー博士 (D. B. Bradley) が、ラーマ4世モンクット王の援助を得て印刷出版した。出版者の名を冠して「ブラドレー博士本 (Chabap Mq Bratle)」と呼ばれているが、二冊本として刊行されたので「二冊本 (Chabap Phim Sog Lem)」

4) Krom Phraya Damrong Rachanuphap, *Kham Nam, Prachum Phongsawadan Phak thi 4*. Bangkok, B. E. 2458 (1915/16). iii.

5) *ibid.*, iv~v.

6) 年代記の著述に関し2種の用語法を区別する必要がある。そのひとつは「taeng」で、伝承の諸史料を材料として新たに歴史記述を行なうこと。もうひとつは「chamra」で、これは「校訂」(*bearbeiten: Wenk*)を意味する。

7) この prince の名は Coedès, Petithuguenin の両学者によってあげられているが、筆者はこれをタイ語文献で確認出来なかった。名前の翻字は Coedès それにしたがった。(Coedès, *op. cit.*, p. 2; P. Petithuguenin, "Notes critiques pour servir à l'histoire du Siam" *BEFEO* 16. 1916. p. 5)

という名も広く知られている。本校訂本の校訂者およびその成立の時期については最近タイ人の学者から異説が出されているが、これについては後述する。(p. 21f. 参照)

3. ラーマ4世, モンクット王 (Somdet Phra Chom Klau, 1851~1868) は Krom Luang Wongsathiratsanit に命じて「年代記」詳述本の校訂を行なわしめたが, 後自らこれに朱を加え, ここにいわゆる「御親筆本 (Chabap Phraracha Hatthalekha)」が成立した。

以上が「アユタヤ王朝年代記」の成立史の大要である。これらの諸本はその大半がすでに印刷出版されている。初版はいずれもいわゆる Nangsū Čhaek⁸⁾ として上梓されたものであって入手はやや困難であるが, なかには一般の市販本として既に版を重ね, 入手の容易なものもある。以下「年代記」の刊本のそれぞれにつき逐一説明を加えて行くこととしたい。

5. «*Phraracha Phongsawadan Krung Kao Chabap Luang Prasoet Aksornit*» (ルアング・プラサート本)。初版: 仏歴2450年 (1907/8)。改訂版: 仏歴 2457年 (1914/15) その後各種の版あり。本書はチュラロンコン王 (Somdet Čhunla Čom Klau, 1868~1910) の廷臣 Luang Prasoet Aksornit のちの Phra Pariyatthammathada (Phae Parien) が某民家で発見した写本を1907年6月19日ワチラヤン文庫 (のちの国立図書館) に寄贈したもので, 今日発見者の名を冠して «Chabap Luang Prasoet Aksornit» または簡単に «Chabap Luang Prasoet» (ルアング・プラサート本) と呼びならわされている⁹⁾。発見された写本は黒色の紙に黄文字で筆写されたいわゆる Samut Dam で, 書体から推定してアユタヤ末期乃至ラタナコーシン初期の写本であるとされている。ルアング・プラサート本は雨にあたり文字の消失した個所が多いのが難とされていたが, 1912年さらに同一の内容をもつ1774年の写本 «Chabap khong Phra Čhao Krung Thonburi» (トンプリー王室本) を得て前者の不備の個所を補い新たに校訂本が作成され2年後の1914年, 「タイ史料集成 (Prachum Phongsawadan) の第1巻に収録されて出版された。

本書は上述した「略述本」の代表とされるもので, 記述はきわめて簡潔であるが, 現存する「年代記」中最古層に属するものであること, 記載する年代の正確なること等をもってアユタヤ史料中最重要文献の一に数えられている。本書の発見によって, それまで孤立していたタイ史がようやく近隣諸国史と結合するに至ったといわれている。(Wood)

Banphanaek (序文) の叙述よりして, 原本の成立は小歴1042年 (1680), Somdet Phra Narai Maharat の勅命により編纂されたものと考えられる。

本文は小歴686年 (1324年) の Phanaeng Choen 大仏の建立に筆をおこし, アユタヤ奠都を経て小歴966年 (1604年) までの出来事を年代順に簡潔に叙述しているが, 原本はおそらく2

8) Nangsū Čhaek については, 拙稿: 「タイ語文献について(1)」『東南アジア研究』第4号, 1964, pp. 2~12 参照。

9) 1907年写本の発見と年を同じうして初版が上梓された。

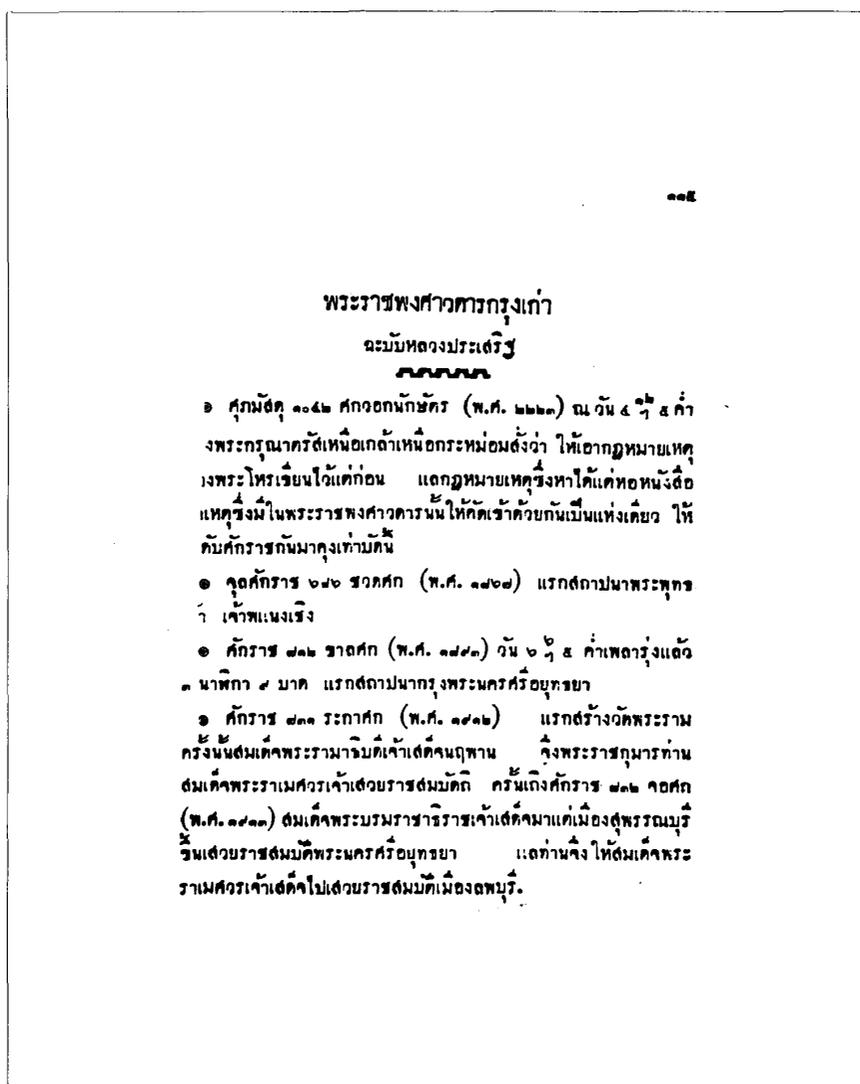
冊本で、本写本を第1巻としこれにつづく第2巻があったものと推定されている。

Otto Frankfurter による英訳 “Events in Ayuddhya from Chulasakaraj 686-966” (JSS Vol. VI, pt. 3. 1909) があるがこの英訳の利用には W. A. R. Wood による批判的解説 “The Pongsawadan of Luang Prasöt” (JSS XIX, pt. 3, 1925) を併読することがのがぞましい。

刊本としては次のいずれかが入手に便利である。

- (1) *Prachum Phongsawadan Phak thi* 1. B. E. 2457 (1914) 以後何回か Nangsü Čhaek として刊行されている。(バンコック在住者であれば王宮前広場 (Sanam Luang) の街頭古書店で簡単に入手できよう。)
- (2) *Kham Hai Kan Chao Krung Kao, Kham Hai Kan Khun Luang Ha Wat lae Phraracha Phongsawadan Kao Chabap Luang Prasoet Aksonnit. Khlang Witthaya*

(「ルアング・プラサート本の刊本の一部」)



พระราชพงษาวดาร ความเก่า
ตามต้นฉบับหลวง เวียงศรีกรุงธนบุรี เมื่อจุลศักราช ๑๑๓๖

● ในขณะพระแก้วฟ้า พระราชบุตรพระเจ้าช้างเผือกปรางดาทอง
เรอตั้งให้ ไปถวายแก่พระยาด่านช้างนั้น ครั้นพระแก้วฟ้าราชบุตรไม่
ถึงเมืองด่านช้าง พระยาด่านช้างก็ว่าเราจำเพาะไร่ ให้ ไปขอพระเทพ
กระบี่กระบี่ แต่พระแก้วฟ้าราชบุตรนั้นเรามาได้ ให้ ไปขอ แต่เราจะตั้ง
พระแก้วฟ้าราชบุตรคืนไปยังพระนครศรีอยุธยา และขอพระเทพ
กระบี่กระบี่ซึ่งจำเพาะแต่ก่อนนั้น ครั้นเสร็จการก็ทรงช้างเผือก พระยา
ด่านช้างก็ตั้งพระยาเด่น ๑ พระยานคร ๑ พระยาทิพนคร ๑ ให้มา
ตั้งพระแก้วฟ้าราชบุตร แต่พระยาด่านช้างให้ตั้งราชดำเนินมาถวาย ว่า
จะขอพระเทพกระบี่ พระเจ้าช้างเผือกก็ด้วยบัญชาตาม จึงตก
ตั้งการที่จะตั้งพระเทพกระบี่ให้แก่พระยาด่านช้าง

● ครั้นถึงเดือนห้าจุลศักราช ๑๑๖๖ พระเจ้าช้างเผือกครีให้
พระยาแมนไปส่งพระราชโองการแก่พระยาด่านช้างอันมานั้น ส่งไปโดย
ทางสมณธิดา

● ขณะนั้นรัฐเจ้าไม่ได้พระเจ้าหงษา ๆ ก็ตั้งพระกระบะเป็นนายกอง
ยกพล ๕๐๐๐ รุกมาชุมนุมอยู่ในตำบลมะเวียงนอกค่านเพ็ชรบุรี เดดกั

(「小歴1136年本」の刊本の一部)

Press, Bangkok, 1964. 472pp.

6. «*Phraracha Phongsawadan Khwam Kao Chabap Ćhunlasakarāt 1136*» (小歴1136年本)。Prachum Phongsawadan Phak thi 4. Bangkok, 仏歴2458年 (1915/16) pp. 1~20.

1911年 Ćhao Phraya Nararatanarachamanit の子 Nai Sathien Raksa (Kong Kaeo) がワチラヤン文庫に寄贈した小歴1136年 (1774年) 本は、諸本との比較研究の結果、その文体からアユタヤ時代に編纂された「年代記」詳述本のトンブリー時代の写本の残簡であると推定された。第3巻ただ1巻を得たのみであるためこれをもって失われた原本の全貌をうかがうことは困難であるが、ダムロン親王は本書を、アユタヤ後期において文筆大いに盛え数多くの文芸作品を後世に遺したボロマコート (Somdet Phra Boromakot, 1733~1759) 王時代に成立したものと推定している。

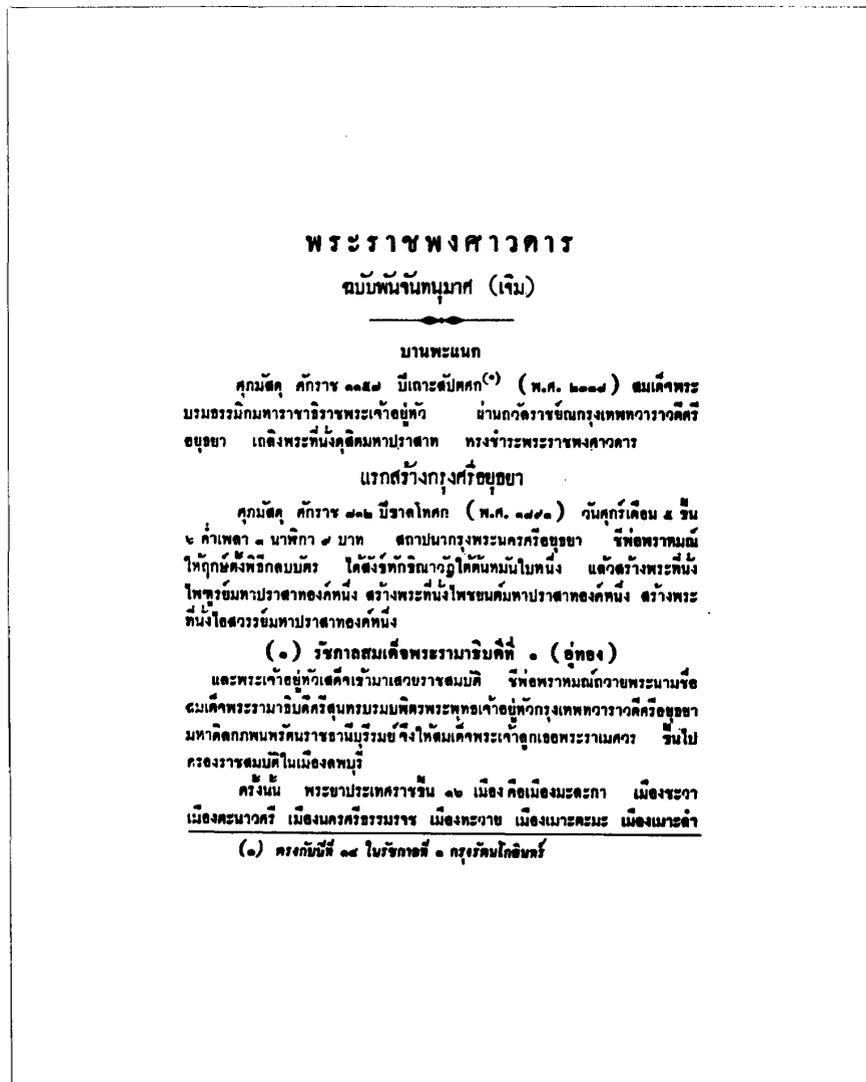
発見された写本の文体はさきの《Luang Prasoet 本》にも匹敵する程 archaic であるが、叙述は略述本よりもはるかに詳細で、「詳述本」の原型をほうふつさせるに足る内容をもっている。現存の第3巻はマハー・チャクラパット王 (Somdet Phra Maha Čhakraphat, 1549~1569) の治世の末期の叙述が主たる内容をなす。

仏歴2458 (1915/16) 年に「タイ史料集成」第4巻に集録され Nangsü Čhaek として上木されて以来発行されていない模様で、「タイ史料集成」全77巻の中でも入手しにくい部類に属している。市販本として印刷されたことがないので利用者は上記の「史料集成」第4巻について見る以外今のところ方法はない。

7. 《Phraracha Phongsawadan Chabap Chunlasakarāt 1145》(小歴1145年本)。未刊。

小歴1145年 (1783) すなわちラタナコーシン朝のごく初期の写本の一部が今日国立図書館に

(「バンチャンタヌマート本」の刊本の一部)



พระราชพงศาวดารพิสดาร

ตั้งแต่พระเจ้าอู่ทองสร้างกรุงศรีอยุธยา

ศักราช ๑๑๒ ปีชวด โทศก วันศุกร์เดือนห้า
ขึ้นหกค่ำ เพลาสามนาฬิกาเก้าบาท สถาปนากรุงพระมหานคร
ศรีอยุธยา ขั้พ่อพรหมณ์ให้ฤกษ์ตั้งพระกมลปราสาท, ใต้สังฆ-
ทักษิณวัตรได้คืนหมั้นขอมหนึ่ง แลสร้างพระที่นั่งไพศุขรथมหา
ปราสาทองค์หนึ่ง, สร้างพระที่นั่งไพศุขนคัมหาปราสาทองค์
หนึ่ง, สร้างพระที่นั่งไอศวรรรथมหาปราสาทองค์หนึ่ง, แล
พระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาครองราชสมบัติ. ขั้พ่อพรหมณ์
ถวายพระนามว่า สมเด็จพระรามธิบดีศรีสุนทรบรมพิตรพระ
พุทธเจ้าอยู่หัว, กรุงเทพทวารวดีศรีอยุธยามหาดิลกภพนพ
รัตนราชธานีบรมมย์, จึงให้สมเด็จพระเจ้าลูกเธอพระวรวงศ์
เธอไชยศิริราชสมบัติในเมืองลพบุรี. ครั้นนั้น พระยาประเทศ
ราชจีน ๑๖ เมือง คือ เมืองมณฑา, เมืองชวา, เมืองคะเนาศรี,

(「2冊本」の刊本の一部)

所蔵されている。発見された写本は2巻で、1巻は Somdet Phra Maha Čhakkraphat (1549～1569) の治世を、また他の1巻は Somdet Phra Maha Thammaracha (1569～1590) を扱っているといわれるが未公刊であるため詳細は不明である。

8. «Phongsawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Phan Chanthanumat (Choem)» (バンチャンタヌマート本)。

Prachum Phongsawadan Phak thi 64 Bangkok, 仏歴 2479 (1936/7) 初版。仏歴 2503 (1960) の版の pp. 1～313 (ただし Krung Kao の部分のみ)

これはラーマ一世の命により1795年作成された「年代記」詳述本の校訂本である。Phan Chanthanumat なる人物と本書との関係は審かでない。Coedèsによれば校訂者は Prince Mähésuén Inthāramèt であるというが、刊本のテキストの冒頭の Banphanaek にも校訂者の

名は示されておらず、典拠は不明である。先学の御教示を乞う次第である。

22巻の写本として発見されたものであるが完本ではなく途中に不備の巻を含む。内容は小歴712年(1350)のアユタヤ奠都に始まり、仏歴2321(1778)年すなわちトンブリー王朝の末期までの出来事を詳述したものである。

本書はアユタヤ朝の部分と、トンブリー朝の2部に分けて、「タイ史料集成」の第64巻および第65巻として上梓されたほかには、市販本として未だ刊行されていない。かなり大部(2部あわせて460頁余)であることもあってか、しばらく Nangsū Čhaek としても出版されることがなく利用者は不便を感じていたが、1960年に全く別人の葬儀の引出物として、それぞれ第64巻、第65巻が印刷頒布され入手が容易になった。前記の Sanam Luang で簡単に入手できよう。

(「プラチャクラパディポン本」の刊本の一部)

พระราชพงศาวดารกรุงศรีอยุธยา
ฉบับพระจักรพรรดิพงศ์ (จาก)

ศกมีศกศักราช ๗๑๒ ปีชวด ไทศก วันศุกร์ ขึ้น ๖ ค่ำ เดือน ๕
เพลา ๓ นาฬิกา ๔ ยาก สถาปนากรุงพระนครศรีอยุธยา^(๑) ซึ่ง
พราหมณ์ให้ตั้งตั้งพิพิธกลขาก ได้ตั้งตั้งกษัตริย์นามว่า สมเด็จพระนเรศวรมหาราช
แล้วสร้างพระที่นั่งไพศวีรย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไพศวีรย์^(๒)
มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไอศวรรย์มหาปราสาทองค์หนึ่งแล้ว

(๑) รัชกาลสมเด็จพระรามาธิบดีที่ ๑

พระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาเสวยราชสมบัติ^(๓) ซึ่งพราหมณ์ถวาย
พระนามชื่อสมเด็จพระรามธิบดีศรีสุนทรบรมยพิทระพุทธเจ้าอยู่หัว
กรุงเทพทวารวดีศรีอยุธยามหาจักรพรรดิรัตนราชธานีบรมบพิตร
สมเด็จพระเจ้าอู่ทอง พระรามศวรขึ้นปกครองราชสมบัติในเมืองลพบุรี
ครั้งนั้นพระเจ้าประเทศราชอื่น ๑๖ เมือง คือ เมืองมณฑล เมือง
ชวา เมืองตะนาวศรี เมืองนครศรีธรรมราช เมืองทวาย เมืองเมะตะมะ
เมืองเมะลำเต็ง เมืองสงขลา เมืองจันทร์บูร เมืองพิษณุโลก เมือง

(๑) ฉบับกรมดำรงว่า อรุณเทพพระมหานคร
(๒) ฉบับพระราชพงศาวดาร, ฉบับพันจันทนุมาศ, ฉบับกรมดำรงว่า พระที่นั่งไพศวีรย์
มหาปราสาท
(๓) ฉบับพระราชพงศาวดาร มีข้อความละเอียดออกไป เช่นกล่าวว่า พระชนม์ได้
๑๑ พระพรรษา แล้วไปรื้อใหญ่หลวงพระเจ้าจึงเป็นพระมหากษัตริย์ ปกครองราชสมบัติ
ในเมืองลพบุรี

พระราชพงศาวดาร
ฉบับพระราชหัตถเลขา
เล่ม ๑ ตอน ๑
แผ่นดินสมเด็จพระรามาธิบดีที่ ๑

ศักราช ๗๓๒ ปีชวดโทศก (พ.ศ. ๑๗๗๓)
วันศุกร์ ๖ ค่ำ เดือน ๕ เพ็ญตามนาฬิกาแก้วบาท ๘ นาฬิกา
กรุงพระนครศรีอยุธยา รัชชูปการหมื่นให้ฤกษ์ตั้งพิธีถนอม
บาศกร ได้ตั้งรัชชกรณาวัฏได้คืนหมันใบหนึ่ง แล้วสร้าง
พระที่นั่งไพศุขย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่ง
ไพศุขย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไอศวรรย์
มหาปราสาทองค์หนึ่ง แล้วพระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาด้วย
ราชสมบัติ พระชนม์ได้ ๓๗ พระพรรษา รัชชูปการหมื่น
ถวายพระนามว่า สมเด็จพระรามาธิบดี ศรีสุนทรบรมพิตร
พระพุทธเจ้าอยู่หัว กรุงเทพมหานครบรมถาวรวัดศรี

(「御親筆本」の刊本の一部)

9. «*Phraracha Phongsawadan Chabap Phim Song Lem*» (2冊本)。 Vol. 1, 1863. 336 pp. Vol. 2 1864, 406 pp.

ラーマ三世王が Krom Phra Paramanuchit Chinorot に命じて作成したといわれる詳述本の校訂本。1865年に米人宣教師ブラドレー博士がモンクット王の援助を得て印刷に付し、それぞれ1863年及び1864年に発行された。

本書は「詳述本」の部類に属する。本文の内容は1350年のアユタヤ奠都から始まり、ラタナコーシン時代初期すなわち小歴1154年（1792）までで終わっている。

上述のとおり、本書はパラマヌチット親王の校訂によるものであると長らく信じられて来たが、最近タイ人の学者でこれに疑義をさし狭む向きがあらわれている。すなわち1962年に刊行された本書の市販本に寄せた「芸術局」の序文は明瞭に Krom Phra Paramanuchit を本書の

校訂者として否定し、同親王の師 Phra Chetphon 寺院の Phra Phanarat 僧正こそ校訂者であると断じ、書名として《Chabap Somdet Phra Phanarat Wat Phra Chetphon》(チエートポン寺パナラット僧正本)なる新しい名を用いることを提唱している。

「2冊本」は古書としても希覯本の部類に属し入手し難いが、アユタヤ朝の部分のみを印刷した市販本(上述のもの)が現われ利用が便利になった。(Phraracha Phongsawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Somdet Phra Phanarat Wat Phra Chetphon. Khlang Witthaya Press: Bangkok, 1962. 655 pp.)

10. 《Phraracha Phongsawadan Krung Kao Chabap Phra Chakraphadiphong》(Chat)
(プラチャクラパディポン本) Bangkok, 仏歴2502. 398 pp.

原本は「貝多羅葉」17束 (phuk). 1908年 Nai Čhit が父 Phra Čhakraphadiphong の記念

(「大英博物館本」の刊本の一部)

พระราชพงศาวดารกรุงสยาม

วันที่ ๔ ๖ ๗ ค่ำ อุดงค์ราช ๑๑๖๗ ปีเดาะ
นพศก เพลาเค้าเสด็จออก ณ พระที่นั่งจักรพรรดิพิมาน
ฉันทเด้าฯ กรมพระราชวังบวรฯ พูลเกล้าถวาย เล่ม ๑
และในเรื่องราวเดิมเหตุนี้ ยังมีคาบศทั้งสอง
มือพระสังฆาธิ และเจ้าฤทธิทธิมงคลพี่น้องอายุอื่นได้
๑๐๐ ปี แต่พระชินศรียังเป็นพระยาปราบเท่าใดครัด และ
พรหมณ์ทั้ง ๑๐๐ บ้านยอมเป็นอุกทธาน พระฤทธิทั้งสอง
จึงสั่งสอนว่าสูททั้งหลาย อย่าประมาท จงช่วยกันทำกำหนด
กันตัว อย่าเมาเมิวนักคิดหา สาตราเร่งทกแต่งไว้ อันพงศ
พรหมณ์สืบไปในภายหลัง จะเป็นกระหัดจะคักอุกเกล้า
เหล่าชี ห่อข่านิวเมาทุกค้ำบด จะละคำทพลเอานัด
โถกะ โทสะ โมทะ มักได้ให้ท่านฉิบหาย อนึ่งท่าน

としてワチラヤン文庫に寄贈したものである。一見前述の「2冊本」と同一の内容をもつかに見えるが、ナライ王の治世の部分は「2冊本」と全く趣を異にし、別途に筆を起こしたものと推定される。かつてこの部分のみを取出し「タイ史料集成」第8巻に集録刊行されたことがあるが (*Prachum Phongsawadan Phak thi* 8. Bangkok, 仏歴2460 (1917)。pp. 67~85) 最近に至り Nangsū Čhaek として完本が出版された。 (*Phraracha Phongsawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Phra Chakraphadiphong (Chat)*. 仏歴 2502 (1959)。398pp.) この新版ではその後の比較研究の結果従来漠然と「2冊本」と同一と信じられていた部分にもわずかながら異同があることを発見したとし、これをすべて脚注で指摘しており対照に便利である。小歴 712 年寅第 2 年 (1350) から小歴 1089 年未第 4 年 (1727) に及んでいる。

11. 《*Phraracha Phongsawadan Chabap Phraracha Hatthalekha*》初版: 仏歴 2455 年 (1912)。

ラーマ 4 世モンクット王は 1855 年 Krom Luang Wongsathiratisanit に命じて「年代記」諸本の比較校合を行なわしめ、その結果出来上った校訂本に王自ら筆を加えた。かくして成立した校訂本が世にいう「御親筆本」である。仏歴 2455 年 (1912) Somdet Čhao Fa Krom Phraya Phanuphanthuwong Woradet によりはじめて 3 冊本として刊行された。「御親筆本」の原本は国立図書館に 22 冊を所蔵するのみであったが、御親筆本と同一の内容をもつ写本「Krom Luang Mahisawarin 本」42 巻が完全な形で発見されている。1350 年のアユタヤ奠都から始まって小歴 1152 年 (1790 年) をもって巻をとじている。仏歴 2457 年以降上梓された刊本には巻頭にダムロン親王の論文 2 篇が収録されている。第 1 の論文は “Tamnan Nangsū Phraracha Phongsawadan” (史籍解題) で、タイ史の研究者の徴すべき文献をとりあげ、批判的解説を加えており、タイ史の研究を志す者の第一に読むべき論文といえよう。O. Frankfurter による英訳がある。第 2 の論文は “Athibai Hetkan mūa kṛn Sang krung Si Ayutthaya” (アユタヤ前史) である。(以上いずれも *JSS* に掲載されたものであるが、ダムロン親王の 100 年記念祭に際し発行された「英語論文集」にまとめて収録されている。(*Prince Damrong, Miscellaneous Articles*. Bangkok, 1962. 124+XXXIII))

12. 《*Phraracha Phongsawadan Krung Sayamčhak Ton Chabap thi pen Sombat khong Britit Miusiam Krung London*》(「大英博物館本」又は「J. H. Hayes 本」) Bangkok; Kau Na Press 仏歴 2507 年 (1964)。iv+743.

1958 年タイ史に関する文献渉猟のため欧米を旅行中のタイの歴史学者 Nai Khačḥon Sukhaphanit (Nai Kachorn Sukhabanij) は大英博物館において洋綴のタイ語写本 30 巻を発見した。この写本は 1948 年 5 月 31 日 J. Hurst Hayes Esq. なる人物が同博物館に寄贈した写本であった。Nai Khačḥon は直ちにこれらの写本をマイクロフィルムに納めてバンコックへ送った。「芸術局」においてこれを検討したところタイ史研究のための有益な資料であることが判明し、1964 年 2 月、この全巻がバンコックの “Kau Na Press” から発行されることとなった。

本書の内容についてみるに、まず冒頭の部分に *Phongsawadan Nua* を想起させる叙述があるが、アユタヤ奠都以後の叙述は「2冊本」と軌を一にした内容である。1784年、ラーマ1世の治世第3年で撰筆している。

発見されたこの写本は洋綴であるが、途中各所に「第何巻了」の文字が挿入されている点からみると、これらは何らかの Samut Thai (タイ式の横型折本) から筆写したものであろうと想像される。

本写本のひとつの特徴とされる点は、年・月・日等の文字のみ書かれていて、数字を入れるべき空白がそのまま残されている点である。これはおそらく「年代記」の校訂に際し、日付の検討を行ない確実な数字を得ぬまま放置されたものと推定される。

今回出版された刊本は、「2冊本」および「パンチャタヌマート本」と異なる場合にはその異本の文言を脚注に加えてあり便利である。

参 考 文 献

1. Krom Phraya Damrong Rachanuphap, "Tamnan Nangsū Phraracha Phongsawadan", *Phraracha Phongsawadan chabap Phraracha Hatthalekha. Vol. 1, pt. 1*. Bangkok, 1952. pp. 1~50. (英訳: "The story of the records of Siamese history" *The Siam Society Fiftieth Anniversary Commemorative Publication. Vol. 1. 1904-29*. Bangkok, 1954. pp. 79~98.
2. P. Petithuguenin, "Notes critiques pour servir á l'histoire du Siam". *BEFEO* 16, 1916
3. Klaus Wenk, "Prächum Phongsāwadān, Ein Beitrag zur Bibliographie der thailändischen historischen Quellen" *Oriens Extremus*. 1962, pt. 2. pp. 232~257.
4. P. Schweisguth, *Etude sur la littérature siamoise*. Paris. 1951. 409p.
5. W. A. R. Wood, *A history of Siam*. London. 1926. (repr. Bangkok. 1959) 300p.
6. George Coedès, "Une recension pâlée des d'Ayuthya" *BEFEO*. 14, 1914. pp. 1-31.